

青砥左衛門藤綱が事

——『太平記』・西鶴・太宰——

赤木孝之

過日、久し振りで鎌倉に行く。

行き詰まった論文執筆の打開策となればとの思いで、青砥左衛門尉藤綱ゆかりの東勝寺橋を見に行ったのであるが、秋日の陽光に照らされつつ、たやすく天恵は得られぬものであるということを知っただけであった。

青砥左衛門尉という人物、日本古典文学大系『太平記』（以下、本文の引用は大系による）の注釈によれば、「この人物不明。元来武蔵国葛飾郡青戸出身の武士か」とあるが、第五代執権北条時頼に仕え、引付衆（評定衆を補佐して訴訟を司る役人）の一人であったようだ。ある人は自分の作品の中でこの人を評して、「質素儉約、清廉潔白の官吏」「真面目な人」と言ったが、『太平記』に書かれたエピソードの数々はまさにそう呼ぶにふさわ

しい。

さて、その青砥左衛門のことは『太平記』巻三十五「北野通夜物語事」の中の「付青砥左衛門事」に登場する。そのひとつのエピソード——ある夜、この青砥左衛門が駒を進めて滑川を渡っている最中、誤って水中に銭十文を落としてしまった。「少事ノ物ナレバ」そのまま行き過ぎるのが普通であろうが、青砥左衛門は「以テ外ニ周章テ」て、近くの里人に五十文を与えて統松を買って来させ、その明かりで水中の十文を探し出したという。

現代の経済法則からいうと、なんとも効率の悪いことをしたものである。当時でもそう考えるのは当然で、後日「十文ノ銭ヲ求メント、五十文ニテ統松ヲ買テ燃シタルハ、小利大損哉」と笑われている。それに対して、青

砥左衛門は「肩ヲ頼テ」、だからお前たちは馬鹿なんだ、と反論する。川に落ちた十文をそのままにしたのでは銭を失うだけであるが、それを捜すために使った五十文は統松を売った商人を潤し、やがて巡って世を潤すことになる、というのである。

こうした、屁理屈とも負け惜しみともいえるエピソードを美談に仕立て上げるのが日本人の常で、だからこそ青砥左衛門の行為は『太平記』にも残った（あるいはそのように創作された）のであろうし、現在、東勝寺橋の傍らにある大正七年に地元の青年会が建てた石碑でも、これをかぎりない美談として讃える口調がありありとしている。

月日は過ぎて元禄の世の中、青砥左衛門のエピソードを知って、確かに美談ではあろう

があまりにも面白くない、とばかりに大幅な翻案を試みたのが、時の浮世草子作者井原西鶴であった。

西鶴は『武家義理物語』巻一の冒頭に「我物ゆへに裸川」というタイトルで、この青砥左衛門尉藤綱の話を納めている。

口の虎身を喰。舌の刃。命を断は。人の本情に非。憂るものは。富貴にして愁。榮む者は貧して榮む。(引用は、中央公論社『定本西鶴全集』第五巻による。以下同)

冒頭から教訓話の様相を呈して、西鶴の話は語り始められる。——滑川に十銭を落とした藤綱、近くの里人たちに銭三貫文を与えて探させたがなかなか見つからない。「たとへ地を割。龍宮までも是非にたづねて」と言っているところへ、一人の人足が三銭、二銭と次々と探し当て、遂に十銭すべて取り出して見せた。藤綱喜ぶこと限りなく、その人足には余分の褒美を取らせて、以下はお定まりの理屈をひとくさり。

西鶴の話が面白くなるのは、ここからである。——人足たちは褒美の金を持ち寄って夜の酒盛りを始めた。酒が廻って、先ほど銭を拾った男が語り始めるには、川に落とされた銭が見つかるわけがない、そこで「時にそれが

しが理発にて。此方の銭を手まわして」というのである。何のことはない、自分で十銭の銭を落としておいて、それを拾い上げ、あつたあつた、と差し出したと言うのである。

一同その男の才覚に感心して見せる中、一人の男、「興を覚して」、人の模範となるべき藤綱を騙すとはちとひどすぎるぜ、俺はこの褒美で年老いたお袋を喜ばせてやろうと思つてしたが、そんなことあつてはお袋も喜ぶまい、とその座を立ち去つた。その男、もう人足たちの仲間に入ることもなく、「朝にく起て。馬の杵を作りて」という生活を始めたのであつた。

悪事は自然と藤綱の耳に入り、藤綱は銭を拾った人足を捕らえて、再び銭を撒かぬよう丸裸にした上に監視人をつけ、藤綱が落とした本当の銭を探し当てるまで探させた。秋から冬になり、滑川の水が涸れてすべての銭が見つかったのが九十七日目で、その人足、危うく命拾いをした。一方の男、もともと武士であつた者が子細あつて身を隠していたと判り、さすが武士、やるのが違う、とばかりに、藤綱、この一件を時頼公に言上して、めでたく召し出されたという。

西鶴も結局は教訓話にまともてしまつては

いるが、それにしても、『太平記』と比べると物語としての奥行きははるかに深くなつているといえる。

西鶴からさらに年月を重ねて昭和の世、西鶴の青砥左衛門尉藤綱をさらに面白く、さらに深みある物語にした作家が出た。先ほど、ある人、と呼んだその人、太宰治。西鶴の作品の中から十二作品を翻案、改作して一本にまとめ、『新釈諸国断』として上梓したので昭和二十年一月、敗戦間近の頃のことであつた。西鶴の「我が物ゆへに裸川」というタイトルは、ただ単に「裸川」に変えられて、冊中のちよろど中程に納められた。(ただし、雑誌発表は「裸川」が最も早かつた)。

ここからが私の本来の守備範囲で、さてその内容は、——というところで、紙幅が尽きてしまった。後は皆さんでお読み下さい。西鶴のよりも面白いこと請け合いで、思わぬ結末も用意されております。

ところで、東勝寺橋辺の滑川というのは、今では子供でも渡れるほどの浅く狭い川ではないが、西鶴の『武家義理物語』の挿し絵などを見ると大河の如くで、人足の腿辺りまで水位がある。さて、青砥藤綱の時代は、いったいどんな川であつたのであろうか。